

「カンガルー日和」(村上春樹) 試論

「カンガルーと「僕」と「彼女」の隠喩的形象について」

増田 正子

I はじめに

村上春樹「カンガルー日和」は他の短編とともに雑誌『トリフル』(一九八一～一九八三)に連載の後、初版『カンガルー日和』(平凡社、一九八三・九)に所収、その後、改稿され『村上春樹全作品1979～1989⑤』(講談社、一九九一・一)に所収されている。さらに『はじめての文学 村上春樹』(文藝春秋、二〇〇六・一一)に改稿されているため、三種の本文が存在する⁽¹⁾。拙稿は、『村上春樹全作品1979～1989⑤』による高等学校教材『精選現代文』(東京書籍)の本文を考察対象とする。

主な先行研究として、山口政幸『村上春樹作品研究事典・増補版』⁽²⁾、佐野正俊「村上春樹「カンガルー日和」の教材研究のために――「カンガルー日和」という〈戦略〉」⁽³⁾、中野和典「逆説の母子像――村上春樹「カンガルー

日和」論――⁽¹⁾がある。拙稿は、これらの知見に基づき、解釈の差異を明らかにしながら、教材研究として「カンガルー日和」の読みの可能性を示すものである。

山口政幸は、カンガルーの雄雌一対ではない〈いびつな世界〉として「母親じゃないカンガルー」という「ミステリアスな雌」の存在に着目する。母親カンガルーとの識別を問題とし、識別可能となった結末から〈僕と彼女が結果的に選んだ「一カ月」という「カンガルー日和」は、子カンガルーが、母カンガルーの保護から離れ、自在に地面を駆けまわるだけの成長を用意した「時」でもあった〉とし、〈僕と彼女が待ち、選んでいったカンガルー日和とは、失望と見失いを回復するプロセスを含んだ、発見の日だった〉とまとめている。

佐野正俊は教材研究として〈「僕」は自らにとって不本意な「動物園」行を、自分に納得させる(「合理化」する)た

めに「カンガルー日和」という外在的要素を持ち込み、この度の「カンガルーの赤ん坊」の「見物」は自らの主体的な判断に基づくものではない、という思考上の手続きを冷静に行っている」とし、「カンガルー日和」という「戦略」を「彼女」との関係に用いることによって（略）「虚構」を作り上げ「彼女」という他者を自己のうちに都合良く回収してしまふ、「僕」という人物の生き方の「問題」こそが、本作品の複数回の「再読」で目指されるべき「問題」なのである」と論じている。（傍点は原文による。）「カンガルーの赤ん坊」を見たい、という「彼女」のいささか風変わりな希望を叶える「僕」という人間の誠実さへの共感という、作品の「プロット」をなぞることによって生じた「初読の読み」は、作品の「再読」による「メタプロット」の捕捉によって顕現してくる「僕」という人物の「自己合理化のシステム」と「他者の自己回収の戦略」の「問題」と衝突し、読み手のうちに葛藤を生じさせる。その葛藤こそが読み手の既存の価値観に揺さぶりをかける「小説の力」とされ、「新しい主体」が「再創造」される」と論じる。

佐野論文に対して、中野和典は「僕」と「彼女」のカンガルーの赤ん坊への関心の差異の程度を問題化し、そのあり様と由来をジェンダーに関わる問題を軸に論じている。「彼

女」の不安の根源は出産への不安と父親の育児に対する無関心さであり、さらに一夫一婦制を脅かす愛人として擬人化している雌カンガルーを配することで、カンガルーの母子像は、それらの現実的不安に対抗する図像（イコン）にもなっているのである」と解釈している。

拙稿は、分析対象とするテキストの本文異同による解釈の差異を認めつつ、教材研究として、「ミステリアスな雌カンガルー」の解釈の可能性を示すこと、さらに「僕」と「彼女」の人物像と関係を本文分析により探ることを目的とする。

冒頭部で「柵の中には全部で四匹のカンガルーがいた。一匹が雄で二匹が雌、あとの一匹が生まれたばかりの子どもである。カンガルーの柵の前には、僕と彼女しかいない」と語られる。動物園の柵の中、雄一匹、雌二匹、赤ん坊という不均衡な光景である。雄カンガルーと「僕」、「彼女」と二匹の雌カンガルーの対照性が示され相互の関係と赤ん坊の意味が問われる。

「僕」は登場人物であると同時に「語り手」である。「カンガルー日和」としてある一日が選ばれ「へしかし何はともあれ、カンガルーを見るための朝はようやくやってきた」に続いて「我々は急いで顔を洗い、食事を済ませ、猫に食事を与

え、洗濯をし、日除け帽をかぶって家を出た」とある。二人が同居していることは明らかであろう⁽⁴⁾。また二人の若さは旺盛な食欲と嗜好(チョコレート・アイスクリーム・コーラ・ホットドッグなど)で推測される。「僕」は自由業らしき人物であろうか、朝の天候によつて月曜日の動物園行きを決めるところに会社勤めの窮屈さは読みとりにくい⁽⁵⁾。「彼女」についても明らかではない。

その朝のきつぱりとした行動と、カンガルーの誕生を新聞で知つてからのほぼ一ヶ月は対照的である。〈そして一か月間、カンガルーの赤ん坊を見物するに相応しい朝の到来をじつと辛抱強く待ち続けていたのである〉とあるが、〈雨〉、〈ぬかる〉み、〈嫌な風〉、〈彼女の虫歯の痛み〉などをあげ、「僕」による意図的な「先延ばし」ともとれる時間を経る。〈この一カ月のあいだいったい何をしていたのか、僕にはまるで思い出せない。(略) そう、それが人生なのだ〉と「僕」は語る。

季節は梅雨を思わせる不安定な天候から〈空にはくつきりとした夏の雲〉が浮かび、〈久し振りに暑い一日〉へと移る。月曜日の朝の動物園(入場客の数よりは動物の数のほうがずつと多い)は、柵を境界として、四匹のカンガルーと、「僕」と「彼女」の二人だけを配置する仕掛けとなる。

中野論文は、雄カンガルーと雌カンガルーの一方について〈育児に無関心な父親や家庭の平穏を脅かす夫の愛人〉の擬人化であり、〈彼女〉が抱える出産への不安をより深刻化させるもの⁽⁶⁾と読む。拙稿では、〈ミステリアスな雌カンガルー〉を、「愛人」の擬人化ではなく、「母親」とは異なる生き方を求める女性像、例えば、仕事等の分野でキャリアアップをはかる姿の隠喩的形象とする。これは決して「愛人」という解釈を否定するものではなく、また、育児と仕事の両立の可能性を否定的に捉えるものではない。若い男女の姿がカンガルーに戯画化される上で、二匹の雌カンガルーを、教材として、女性の生き方の選択という解釈を試みたものである。父親カンガルーの〈才能が、涸れ尽きてしまつた作曲家のような顔つきで餌箱の中の緑の葉をじつと眺めている〉(まだ餌箱の中に失われた音符を探し求めている)という描写が、自己実現を目指す生き方(作曲家・音符)と生活(餌箱)との葛藤というテクストの方向を示すと考えるからである。(傍点は筆者による。以下、同じ)確かに、もう一方の雌カンガルーの〈跳躍をくりかえす〉姿を「ステップアップ」と関係づけることは短絡的すぎるといふ批判もあるだろう。しかし、赤ん坊を袋に入れ悠然としている母親カンガルーの姿に対して、身軽さと上昇志向を想起させる〈跳躍〉

する姿を描いていることは示唆的である。母子カンガルーのみならず、父親カンガルーともう一方の雌カンガルーを焦点化することによって^⑥、新たな解釈が可能となるのではないか。

Ⅱ 「僕」と「彼女」の人物像と関係（1）

テキストの「僕」は〈これまで女の子と議論をして勝ったことなんて一度もないのだ〉と巧妙に「彼女」との対立を避け、〈僕は動物図鑑でカンガルーについて何もかもをきちんと調べてくるべきであったのだ。こうなることははじめからわかっていただから〉と、「彼女」に対して保護者的な「優しさ」を示しながら、具体的な行動は伴っていないかった。

他方「彼女」のカンガルーの赤ん坊への執拗なこだわりは、精神の不安定さを示す。さらに「僕」への質問攻めや両者の会話から、他者への依存的傾向とやや自己中心的ともいえる幼さ（未成熟さ）がうかがえる。

〈ねえ、まだカンガルーの赤ん坊はちゃんと生きていますか？〉〈死なないまでも、病気をしてどこかに入院したかもしれないわよ〉〈ノイローゼにかかって奥にひっこんでるん

じゃないかしら〉〈私ね、なんだかこの機会を逃すと二度とカンガルーの赤ちゃんを見られないような気がするのよ〉と病・死にまつわる不吉な問いを発するが、「僕」からの〈略〉なぜそれなのにカンガルーの赤ちゃんだけがいま問題になるんだらう〉という質問には〈そんなことじゃないで。それはカンガルーの赤ちゃんだからよ。それ以上の何物でもないのよ〉と自閉する。それに対して〈僕はあきらめて新聞を眺め〉〈これまで女の子と議論をして勝ったことなんて一度もないのだ〉と、個別であるべき「彼女」は〈女の子〉と一般化され、女性の一般的「属性」として扱われる^⑦。本

テキストのカンガルーの赤ん坊は一ヶ月ですっかり成長し、〈私たち、もつと早く来るべきだったのよ〉という「彼女」の非難（一ヶ月の過ごし方）に対して「僕」は、甘い嗜好品（チョコレート・アイスクリーム）を「彼女」に運ぶことで回避しようとする。

「彼女」が母親の袋に入る赤ん坊の姿にこだわる理由は、子どもを産み育てること、新たな家族を持つことへの願望と不安である。つまり「彼女」の不安定さは、「母になること」「愛すること、愛されること」の根源的不安に起因すると考える。このテキストでは多用される語がいくつかのキーワードとなりうる。〈赤ん坊〉〈袋〉〈保護されている〉これらの

カンガルーに関連する語はすべて、「母子関係」あるいは「親子関係」の隠喩である。「彼女」の関心は「母子」の姿であり、意識は「赤ん坊」「袋」「保護」に強く向かう。あまたの動物の中でカンガルーが選ばれているのは、母親が「袋」で「赤ん坊」を「保護し育てる」という一連の母性行動を具体的な姿と行動で明確に示してくれる動物だからである。

〈あの袋に入るってすてきだと思わない〉という「彼女」の発言は胎内回帰願望と解釈されるが⁽⁸⁾、拙稿では「出産への不安」のみならず、その後の育児に対する不安、つまり「彼女」の「愛すること、愛されること」に関わると考える。

子宮への回帰願望は乳幼児時代の「保護される」「愛される」ことの疑似体験願望であるが、同時に現在の二人の関係を映し出す。つまり「彼女」の「愛され方」(「僕」からの)の問題であり、「僕」の愛人の存在という怯え以上に「彼女」の根源的不安は、「僕」そのもののあり様(他者との距離をつくる)に起因すると考える。「僕にもっと愛されたい」という「彼女」の願望が推測されるが、愛情の尺度そのものが相対的・主観的なものである上に、両者がそれぞれ課題を抱えているとすればことは複雑である。また「彼女」が「愛される」ことを求めることは、同時に「愛する」ことができる

かを自問することでもある。「彼女」の生育歴における母子(親子)関係の問題の可能性も否定できない。

「彼女」は、母親になりうる状況で、カンガルーの赤ん坊の守られている姿を自らの目で確かめることで精神の安定をはかろうとし、結果として、その目論みは概ね成功したといえる。このように、「語り手」によって「彼女」の課題と変容が語られるが、「僕」については明確に語られているとはいえない。

繰り返すが、雄カンガルーが探し求めているのは〈餌箱の中の失われた音符〉である。雄カンガルーの存在は、「芸術(的なもの)」と「生活」に引き裂かれる「男性」像、つまり「僕」の隠喩である。この雄カンガルーは「赤ん坊」の「父親」であり「夫」であるが、「赤ん坊」や「妻」に関心を向けることはない。

拙稿で二匹の雌カンガルーについて、「赤ん坊」と一体となる「母親」とステップアップを図る女性の二つの生き方という読みを示した。確かに男性も社会的存在として「芸術(的なもの)」と「生活」あるいは「男性(個)」「父親」「夫」とに引き裂かれる。しかし、変化しつつあるとはいえない一般的には女性が妊娠、出産、育児において主体とならざるをえない今日の状況では、より「女性(個)」「母親」「妻」

に分裂せざるをえない。「母親」を選べば、一定期間とはいえ「袋」(子宮)で育て、その後も授乳、育児と「保護」することが求められ、一方の雌カンガルーのような身軽さを持つことは難しい。

Ⅲ 「僕」と「彼女」の人物像と関係(2)

次に、二人の関係のあり様を会話から探っていく。

〈でも、どちらかが母親で、どちらかが母親じゃないんだ〉
 〈うん〉〈とすると、母親じゃない方のカンガルーはいつた、いなんだ?〉と問う「僕」に対して、彼女は、〈わからない〉と会話カッコ表記(「」)のない表現で応じる。この問いは二匹の雌カンガルーという「いびつさ」に対する「僕」の素朴な疑問ともいえるが、「母親」にならない「女性」に対する男性側からのジェンダー問題に抵触する発言ともいえる。これに対し女性として「彼女」は返答できず〈わからない〉と「つぶやく」。

同様の表記箇所は、すっかり成長し地面を駆けまわるカンガルーの赤ん坊を目にして、「彼女」の〈もう赤ん坊じゃないみたい〉という発言に対して、〈赤ん坊みたいなんだよ〉という「僕」の「つぶやき」である。「僕」と「彼女」に赤

ん坊への関心度にズレが生じているが、「僕」は「対立」を好まないで、その違いを露わにしない。〈僕は彼女の腰に手をまわして、軽くとんとんと叩く。彼女は首を振る。僕は何とか彼女を慰めたいと思う。カンガルーの赤ん坊がすっかり成長してしまったことについて。でもどのように慰めたところで、それはもうとにかく成長してしまったのだ。だから僕は何も言わない〉と、「僕」は言語によるコミュニケーションを放棄し、身体によるコミュニケーションに向かう。二ヶ所の会話カッコ表記(「」)なしの、「つぶやき」もしくは「心中語」というコミュニケーションの「裂け目」から、二人の関係のあやうさが見える。

テキストの後半部でようやく「彼女」の願望がかなう。

「僕」がホットドッグを手に戻ってきた時、「彼女」は〈母親の袋にもぐりこんで、小さな尖った耳の先端だけがびよこんと上に飛び出している〉姿で赤ん坊が保護されていることを確認し、母親カンガルーが〈力持ちで〉で赤ん坊が〈敵からも保護されている〉姿に満足する。「彼女」の不安は幾分解消され、〈ねえ、どこかでビールでも飲まない?〉という「彼女」からの誘いとなる。これまで「僕」が「彼女」に運んできた〈チョコレート・アイスクリーム〉〈ホットドッグ〉〈コーラ〉が「子ども」的嗜好品とすれば、〈ビール〉という

大人の嗜好品への移行もうかがえる。

「僕」の〈いいね〉という同意は、「彼女」の充足感を受け取った安堵を示すが、ここでも「僕」の内面は語られない。

「僕」は他者との関係において希薄であり、踏み込もうとはせず、「彼女」とも対立を避け、概ね良好な関係を維持している。しかし、「僕」が示す表層的ともいえる「優しさ」に反して、このように「裂け目」として「僕」の深部が透けて見える。

「雄カンガルー」(「僕」は、ひたすら〈餌箱〉(生活の糧を得る仕事・役割)に〈失われた音符〉(芸術だけ関わらず、自らの可能性を求める自己実現的なもの)を探し求めているが、それは徒労に他ならず、〈人生とはそういうものだ〉という諦念的境地に繋がる。「語り手」は登場人物「僕」を「人生に疲れた」様子の雄カンガルーとして戯画化し、滑稽さと悲哀を込め、〈失われた〉〈枯れ尽きてしまった作曲家〉と過去・完了形で語る。〈略〉コーヒー・ショップでちよつと一服しているといった感じ〉という現在形で〈汗ひとつ〉かかず〈力持ち〉で、赤ん坊と一体化しながらも余裕を見せる母親カンガルーと、未来に向かって飛躍するかのような一方の雌カンガルーとは対照的である。

本テキストは、「彼女」が動物園でカンガルーを見るとき

う非日常的出来事を通した「欠如―充足」(不安―解消)という変容の物語である。そして「僕」は、「彼女」の変化を捉えながら、「父親」にも「夫」にもなりきれず、徒労ともいえる「自分探し」をする存在であり、終結部で「彼女」が幾分かの「安定」を獲得しえたのに対して、「僕」は「宙づり」のままである。

ホットドッグの焼き上がりを待つ「僕」にステイビー・ワンダーとビリー・ジョエルが〈歌を唄ってくれた〉とある⁽⁹⁾。具体的な歌手名を出すことで時代や社会状況が示されるが、都会の孤独や人生の意味を歌う男性歌手が選ばれていることも興味深い。また、「僕」に対して〈唄ってくれた〉という表現から「僕」の「現在」のあり様も連想させられる。〈才能が枯れ尽きてしまった〉「僕」は「唄う」側という表現者ではない。確かに「僕」は多くは語られないが、表現の細部に「僕」の問題が見えよう。佐野論文の〈「彼女」という他者を自己のうちに都合よく回収してしまう〉、「僕」という人物の生き方の「問題」とは、「彼女」を〈都合よく自己回収〉しているように語られながら、その生き方の表面的な器用さが、結果として「僕」を「宙づり」にして行き場を失わせているとも考えられる。問題を抱えている「彼女」像を語り、その変容に明快さと単純さを与えている一方で、

「僕」自身の課題を捉えることが重要である。

IV おわりに

「僕」の隠喩的形象である〈雄カンガル〉は、社会的存在として役割に引き裂かれ「宙づり」となる「個」の存在を問いかけるが、教材研究としても「彼女」の変容に対して「僕」を問題化することは難しい。「母親」ではない方の雌を〈ミステリアス〉と命名する「僕」が、皮肉なことに、もつと〈ミステリアス〉な存在なのである。初読段階で得られる軽い読み心地は、精読により「個」と「他者」との関係という重いものへと変わるのではないだろうか。高校生にとって身近で重要な問題である異性や同性との関係（恋愛・友情）、あるいは家族関係をとらえなおす機会としても意義深く、教材価値は高いと考える。

なお、拙稿で試みた三匹のカンガルについて解釈は、教材としての読みの可能性を求めたもので、高校生にとって、結婚、仕事、育児など未知の領域への意識化につながることを期待するものである。二匹の雌カンガルおよび「彼女」の解釈については、女性が置かれている社会的状況と関連づけることによって、さらに批評的な読みが必要となると

考える。また、「僕」に関わる読みは、小説の読み方において「語り手」を捉えることの重要さを示す。社会的存在として「優しさ」を装う「僕」の「関係における希薄さ」と、喪失した「何か」を探し続ける「僕」のあり様を主体的に問い続けることが求められる。

【註】

- (1) 中野和典「逆説の母子像―村上春樹『カンガル―日和』論―」（『福岡大学日本語日本文学』第二二号 二〇一二・二）に、本文が三種類あることが指摘され、精密な異同表がある。
- (2) 山口政幸『村上春樹作品研究事典・増補版』村上春樹研究会（鼎書房、二〇〇七・二〇）
- (3) 佐野正俊「村上春樹『カンガル―日和』の教材研究のために―「カンガル―日和」という〈戦略〉―」（『日本文学』二〇〇〇・八）
- (4) 「かえるくんのいる場所」（『はじめての文学 村上春樹』文藝春秋、二〇〇六・一二）には、〈略〉若い夫婦が動物園にカンガル―を見に行く」とある。
- (5) 『はじめての文学 村上春樹』（前掲）では、本文が〈会社は休むことにした。なにしろそれは一ヶ月ぶりのカンガル―日和なのだから〉と改訂されている。

(6) 中野和典は前掲論文で、〈カンガルーの母子像は、オーストラリアのイメージとともに、父親カンガルーや他の雌カンガルーをも背景とすることによって、子どもを産むことにまつわるあまたの不安に対抗する逆説の母子像として高い強度を獲得している〉とある。

(7) 中野和典は前掲論文で、この個所について〈女の子というのは〉〈女というのは〉〈女性は〉という本文の異同とともに〈心配性を女性の属性とする「僕」の語り方は性差別的でさえある〉と論じる。

(8) 中野和典は前掲論文で〈胎内回帰願望は出産と対極に位置する行為であり、出産への不安を最も端的に表した〉と論じる。

(9) スティービー・ワンダー

Stevie Wonder 歌手。アメリカ生まれ。「一九五〇—」

ビリー・ジョエル

Billy Joel 歌手。アメリカ生まれ。「一九四九—」

「カンガルー日和」(東京書籍『精選現代文』) 本文 注